

唐津の地層

岡本作礼展

自由で伸びやか。多様な意匠。桃山時代に生まれた姿の美しい唐津焼は、今も、焼きもの好きを魅了してやまない。唐津で生まれ、古唐津の研究に勤しみ、伝統を見つつ、革新の在り方を見極めて実践してきた名手が見せる唐津焼の現在。

2022年1月10日(月)～30日(日)

12:00～17:00【水・木曜定休】

陶磁研究家の小山富士夫は、朝鮮陶磁の神様といわれた浅川伯教が将来した黒砂糖のような、ねっとりとした釉薬の掛かった《黒高麗の盃》を絶賛している。また、良寛の書と酒器の収集家で知られている秋山順一の自慢の一品が《黒高麗の徳利》だった。そんな黒高麗に挑戦しているが、唐津の陶芸家・岡本作礼である。その魅力は幽玄な趣にある。岡本の黒高麗は、鉄分のほとんどない白い土を使うことで、柔らかな黒の表情を生み出している。岡本は黒高麗を自家菜籠中のものとしたが、それ以外にも、井戸や粉引、絵唐津や朝鮮唐津の作品も、また魅力的である。私が面白いと思っているのが、織部風の《朝鮮唐津の手付鉢》だ。李朝に似て、唐津は自由なのである。現代の唐津は古唐津を意識し過ぎて、返って唐津本来の自由さを失っているように思う。岡本は石川県の能登島でガラスの技法を習得し、中国の鈞窯やわが国の彩文土器にも挑戦している。兎に角、研究熱心なのである。そうした作陶姿勢が自身の作品に表れないはずがない。今展には、黒高麗を中心に、井戸や粉引、唐津や鈞窯の茶陶、酒器が出品されるというので、とても楽しみにしている。

森 孝一(美術評論家・日本陶磁協会常任理事)

作家在廊日

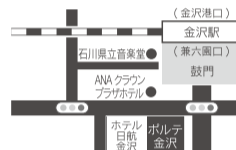
1月15日(土)・16日(日)

古唐津の見極め方、魅力についてもお話を伺えます。

POST CARD

皆様にとりまして、2022年が幸多き年でありますように

アート 920-0853 金沢市本町2丁目15-1 ボルテ金沢3F
[ホテル日航金沢横]
玄 羅 TEL/FAX 076-255-0988
g e n r a E-mail genraart@ozzio.jp
Web http://genraart.com



国の新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインに沿い、鑑賞環境には十分気をつけてまいります。
会期中、時短営業・臨時休業・入廊制限する場合がございます。

アート
玄 羅
g e n r a



岡本作礼略歴

1958年 佐賀県唐津市生まれ
1978年 陶芸家中里重利氏に師事
1989年 唐津市蔵木(きゅうらぎ)町の作礼山山麓に
工房を構える
1999年 石川県の能登島ガラス工房にて
ガラス技法のひとつ、パート・ド・ヴェールを会得
2003年 現代日本の陶芸・受容と発信(東京都庭園美術館)
2008年 野村美術館で個展(京都)
2014年 日韓交流展(釜山・韓国)
現在、佐賀大非常勤講師、佐賀県陶芸家協会会員